# 陰謀団敗退の宇宙的見通し（Ｉ）

David Wilcock
October 27, 2014

【訳者注】永遠に身を隠したかと思われたデイヴィド・ウィルコックが、ほぼ 2 か月半ぶりに長大な（プリントして 100 ページに及ぶ）ブログ記事を発表した。相変わらず彼の「見通し」は楽天的で、ある種の宗教的安らぎを与える。ここには『ザ・シンクロニシティ・キー』のおさらいの部分がかなり含まれており、これは頭の整理のために必要なのだが、膨大になり過ぎるので、ある程度削った――前の論文「ルシファーの正体を暴く」に出てきたエピソードなども。特に注目すべきは、第 2 部「カインの血統」の人類の始まりを説明する部分――創世記冒頭の「神」、蛇（ルシファー）、アダム、エバ、カイン、アベルらの血縁と血統について彼の得た啓示――であろう。この第 1 部では、新しいいくつかの大型ハリウッド映画が、明らかに、「陰謀団」を滅ぼそうとする側の「連盟」によって作られているという、驚くべき事実が中心になっている。この翻訳は 3 部に分かれる予定である。

ぜひとも必要だった 10 週間の休暇の後、再び読者にお目にかかる――希望とプラス志向と、我々の最も空想的な期待をはるかに超える、未来のメッセージを携えて。

ご覧のような見出しを掲げたが、我々は今、画期的にポジティブな結果を伴う、広大な宇宙的計画の結実を、本当に見届けようとしているのだろうか？

ハリウッド映画は「陰謀団」をこれまでにないやり方で暴いており、きわめてポジティブな

変化が来つつあることを示唆している。ベルトを固く締め離陸に備えよう！

## 世の中いよいよ狂ってきた——本当にそうか？

この世の生活がますます常軌を失い、ますます予想できなくなったことは確かである。

それはまだ控えめな言い方だ。

もっとはっきり言えば、あらゆる物、あらゆる人間が狂い始めている。

本当にそうか？　本当に天が落ちてくるのか？　我々はみな死なねばならないのか？　膝をがっくり落として母の名を呼ばねばならないのか？

嫌なエボラウィルのようなものが我々の肉を食い漁り、あと数十年の我々の寿命を待てないというのだろうか？

読者が読まれようとしているのは希望のメッセージであって、世の終わりの話ではない。

もしあなたが“恐怖ポルノ”をお望みなら、それはお門違いというものだ。そういうものを望むなら、そこらにいくらでもあふれている。

## 権力構造は崩壊しつつある…内からも外からも

いわゆるイルミナティ権力構造を崩壊させつつある国際的連盟があり、一方、それ自体の構成員階層内部からも、それは崩壊しつつある。

画期的なフィナーレはまだ起こっていない。しかしその方向を指し示す新しい情報は連日続いており、我々はそれに圧倒されている。

現在、たった 4 か月前と比べても、12 倍から 25 倍の“真相ジャーナリズム”記事が、ほとんど毎日書かれているようだ。

あまりにも多くのことが、ほとんど同時に起こっているので、ついていくことさえできず、そのすべてについて書くことは望めない。

この時点で、最初に注意を要求すると思われる、いくつかの非常に重要な物語がある。

先を読めばわかる通り、高位の「陰謀団」の逮捕を予測するメッセージが、ついに主流の映画の中に入ってくるようになった。

## “ほら言った通りだろう”と言う人たちのパーティがすでに始まっている

2013 年のスノーデン暴露事件以来、画期的にますます多くの人々が、私たちがここでずっと前からリークしてきた基本的事実に目覚めるようになった。

金融システム、メディア、企業、軍、選挙による公職者を、背後からコントロールすることを通じて動いている、影の政府があることは明らかである。

ビルダバーガー、New World Order、イルミナティ、「陰謀団」といった言葉はすべて、この時点で、ますます増えていくある人々を呼ぶのに、かなり互換性をもつと思われる。

ヒトラーはおそらく、この種のアジェンダの最も目立つ、過去の唱道者だった。しかし彼が残したインフラストラクチャーは、第二次大戦後も簡単になくなりはしなかった。

> 民衆の大多数は、小さなウソよりも大きなウソに、より容易く騙されるものだ――アドルフ・ヒトラー

この「大きなウソ」は、我々が通常の社会から完全に遮断されて暮らしていない限り、無視することのできないものになっている。

私が薬物の類を絶ってから、この 9 月 21 日で 22 年になる。それは必ずしも楽ではなかっ

た。しかし今はこの方がはるかに幸福である。

依存症を治し解放されるためには、まず**問題を認識**しなければならない。そのうえで怖れることなく徐々にそれを減らしていく必要がある。

人々が物を考えないことは、支配者にとって実に幸運なことだ――アドルフ・ヒトラー

## あなたはそれを無視できない

映画やポップ音楽を求める若い人々は、ルシファーのシンボルが彼らの顔に次々に突きつけられるたびに、次第に裏切り行為を受け入れていく。

偉大な嘘つきは偉大な魔術師でもある――アドルフ・ヒトラー

若者をつかむ者だけが未来を手に入れる――同

ウソを大きくし、単純にして、それを言い続けよ、そうすれば最後には信じられるだろう――同

巧妙に持続的にプロパガンダを用いることによって、天国を地獄に、極端に惨めな生活を楽園に見させることができる――同

私は今日、私の行為は全能なる創造者の意志に従っているものと信じている――同

## それは彼らが望んだようには受け入れられていない

目を見張るほどの多額の金が、ルシファーのイメージを、あたかも“進んデル、カッコイイ”かのように思わせようとして費やされている――が効き目はない。

「陰謀団」を暴こうとする無数のユーチューブ・ビデオが、**何百万回**と見られている。

ちょっと考えてみていただきたい。そのような回数を稼いでいるのは、もはやテレビでない、**真理**である。

「若死にせよ」を歌うケシャのビデオ――彼女はこれを歌うよう強制されたと言っている。

グラミー賞会場で「ダーク・ホース」を歌い演技するケイティ・ペリー

## あるチーム・アイデンティティがこれらの図像やシンボルの周りに生じた

時間がたつほどに、ある強力な人々のグループが、この暗いイメージの周りに、ある“チー

ム・アイデンティティ”を形成している証拠が見えてくるだろう。

彼らは自分たちが悪者だとは思っていない。実は彼らは、邪悪な、暴虐な神から人類を救っていると考えている。

彼らの考えでは、ルシファーは誤解された善き者で、天上のパンテオン（万神殿）から蹴落とされ、地に「落ちた」が、それは腐敗した独裁体制に反対したためである。

彼らは、ルシファーは知恵と光を伝えるもので、地上を支配し、これがやがて、栄光ある“新世界秩序”（New World Order）へと発展することになると信じている。

ルシファーは敗北するだろうというキリスト教の教えはすべて、Adonay と彼らが呼ぶ、偽りの邪悪な神の宣伝する、無知な迷信として退けられる。

彼らはキリスト教的なすべてを憎むように教えられ、それらは、セックスや知識や自由の抑圧といった自己抑圧の教えだと信じている。

彼らの構成員は非常に強力であり、幅広い支配と受容を求めて、現在のような宣伝活動をずっと行ってきた。

彼らを一つのグループに結束させるのに用いられるストーリー・ポイントのいくつかは、ごく少数の者だけに知られていて、それはこのウェブサイトで初めて、論じられることになるだろう。

## 映画 *Gilligan's Island*

ハイレベルの秘密に直接アクセスをもつインサイダーと話し始めたとき、あなたが発見することの一つは、この計画がずっと昔から進行していたということである。

NPR（ナショナル・パブリック・ラジオ）によれば、クラシックとなった 1965 年のシリーズ *Gilligan's Island*（『ギリガン君 SOS』）を創作した Sherwood Schwartz は、登場人物を 7 つの大罪からつくった――

> *Gilligan's Island* は地獄の比喩だったのか？
> http://www.npr.org/blogs/incharacter/2008/01/your_turn_gilligan.html

かわいそうな漂流者たち。毎週彼らは島からの脱出の方法を考えた。毎週ギリガンは彼らの脱出計画を挫いた――通常はよかれと思って。

この番組が終わって何年もたってから、その作者シャーウッド・シュワーツは、登場人物のそれぞれが 7 つの大罪の 1 つを表していることを認めた――**傲慢**（教授）、**怒り**（スキッパー）、**情欲**（ジンジャー）など。ギリガンは**怠惰**ということになっていた。

しかしよく考えると、**この島は「地獄」であったかもしれない、そして赤い服を着たギリガンは彼の島で彼らを管理する悪魔だったかもしれない**ことが分かってくる。

*Gilligan's Island* と 7 つの大罪
http://deadlysins.com/features/isle.html

1965 年、アメリカの大衆が初めて与えられたのは、ギリガンと、遊びのクルーズ船が激しく難破した結果、小さな太平洋の島に閉じ込められた、不運な、他の 6 人の漂流者という風変わりな物語だった。このドラマの続いた 3 年（98 話）の間、島の住人達は、電波送信、煙の合図、ミノー号の修復、筏、またディープダイビング・スーツを考案して、ギリガンに海底を歩いてハワイまで戻ってもらうことなどを考えて、島からの脱出を試みた。

彼らは、クビ狩り族、気まぐれな大西洋横断のスタント・パイロット、月からの帰りのカプセルに乗った飛行士などに出くわす。

しかし漂流者たちは不思議にも島から出られず、相互の付き合いを永遠に運命づけられているようだ。

実は、この少々欲求不満だとしても、全く争いの起こらないシチュエーション喜劇と見えるものは、**サルトル流の地獄を表したもの**で、登場人物たちは 7 つの大罪を表し、ハルマゲドン（大洪水の形での）後の時代を、互いに絶えまのない拷問を行いながら生きている。

この劇を見る人々は、ギリガンを通じて、登場人物たちの永遠の地獄生活を見ることになる。ギリガンという名は、スコットランド語の gillie（狩りや釣りの案内者）から来ている。

ギリガンは怠惰の罪を表しているので、彼自身の脱出の不能または無気力によって、他の罪びとの中に落ち込んでいる。

このドラマで、漂流者たちの救出の試みを不注意から台無しにするのは、いつもきまってギリガンである。

## なぜこの話をしたか？

*Gilligan's Island* の作者シャーウッド・シュワーツは、自分のやっていることがわかっていた――著書の中で明らかにしているように。

ギリガンはいつでも間抜けな男として現れ、スキッパーにはいつも「ボッチャン」（My Little Buddy）と呼ばれ、いつも赤い服を着ている。

「陰謀団」は好んでこのような演出をする。彼らは、このドラマが本当は何についてなのかを、たとえそれが自明でも、考えてみる気になる者はいないと考えている。

ひとたび心を広げて、「陰謀団」は本当に存在するのかもしれないと考え始めると、*Gilligan's Island* は、彼らが人間をどう見ているのかについての、初期のテレビによる比喩ではないかと分かり始めるだろう。

彼らは愚かな滑稽な引き立て役のポーズを取り、一見して馬鹿げた映画やテレビ・ドラマを制作し（これは 1960 年代半ばだった）、自分を全く無害なもののように見せかける。

それと同時に、彼らは、我々すべてが彼らのガイドラインの内部に留まるように、そして社会の誰も、彼ら自身のネガティブな感情をはみ出す者がいないように、最善の努力をする。

この同じ考え方が、もっと暗い、大胆なやり方で明らかに再現したのが、画期的なテレビシリーズ *Lost* であった。

## ３つの単語

事態は最近、ますます超現実的になっていく。我々が知っていると思っていたすべてが書き換えられていく――毎週のように。

“平均的人間”と言えるようなものは、もはやいない。一人ひとりが、より大きな現実へと急速に目覚めつつある。見ているだけでも驚くほどだ。

「陰謀団」が暴かれるにつれて、ますます彼らは必死になって、超刷新的な、流行病的恐怖を、次々と企業メディア上に製造し始めたようにみえる。

ネガティブな将来計画の暴露と敗北の最終段階が、いよいよ明らかに否定できないものになってきた。

あなたには、まだ見えないかもしれない。そこからの出口があると信じられないかもしれない。

その構造上、一見して全体の状況が確認できないように思われ、そこを通り抜けるポジティブな道を見つけるには、信念の働きが要求されるように見えるかもしれない。

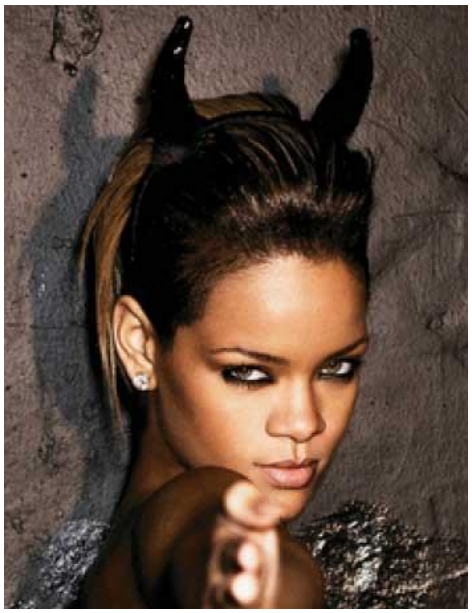
にもかかわらず、ひとたびこのグローバリストの将来計画がついに崩れ始めたとき、あらゆる人が使うであろう言葉（語）はたった 3 つである。――単純に We All Knew（私たちはみんな知ってた）と言うだろう。

## 一斉蜂起が起りつつある

これらポップ音楽アーティストたちは、どうしてこれほど大胆に、ルシファーのイメージを宣伝することができるのだろうか？　彼らは自分がやっていることを知っているのだろうか？　そして、**なぜ**こうしたことが起こっているのだろうか？

このイメージを演ずるすべてのアーティストの間に、ある共通のつながりがある――レディ・ガガ、ケイティ・ペリー、ブリットニー・スピアズ、マイリー・サイラス、ニッキー・

ミナージ、それにライアンナ。・・・・・・



彼らはすべて同じプロデューサーを共有している。

ケシャは今、隊伍を乱して、この同じ男 Dr. Luke を相手取って訴訟を起こしている。

もし訴訟になれば、ドクター・ルーク自身が、自分は人格を無視され、脅迫されていたと暴露するかもしれない。

非常に面白いことに、ケシャの母親は「ケシャと彼女の友達、レディ・ガガなどもみんな、このこと（性的強制）を公表しようとしています」と語った。

## すべてが完全な計画の一部

映画やポップ・ミュージックのような主流文化が、このような図像をこれほど大胆に使うときには、大金持ちがそこに関わっているとみなければならない・

これらのアーティストを超スターに仕立てるためには、何百万ドルというカネがかかる。これらのシンボルやテーマの宣伝は明らかに意図的である。

我々が *Financial Tyranny* に書いたように、これらの図像は、オリンピックとかスーパーボウルとかグラミー賞のような、最も観客の多い公的儀式にも現れている。

あなたにはこれは恐ろしいことに思えるかもしれない。私にはよく理解できる。ヒトラーが言ったように、“大ウソ”は実は最も安全な賭けだ——なぜなら、誰もそれが本当に本当だとは考えないから。

しかし真実を暴くことは必要であり、それは自由をもたらす。

私がお勧めするのは、一歩下がって、それを情報——解決すべき謎——とみなし、それを怖れない許可を自分に与えることである。

公平な立場から見て、見えているのは、**我々に隠された途方もなく大きな真実がある**という、疑うことのできない証拠である。

私が理解している限り、その最上の部分は、この地球的なドラマの**ポジティブな**側面についての隠れた情報は、ネガティブな側面よりはるかに大きいことである。

現在起こっている事象の何一つとして、ランダムなものはない。生命の大規模な損失が予定されているのでは**ない**——これはすべてある**完全な計画**の部分である。

## 構造をもつ地球的通過儀礼

私たちは、一つの構造をもつ、地球的通過儀礼のプロセスを通過しつつある。そしてこれは途方もなくポジティブな結果をもたらすだろう。

ネメシス（仇敵）は実在する——そしてヒーロー（英雄）も実在する。

そのヒーローは**あなた**だ。

## 許すことと理解すること

もしあなたがこれを冷静に眺めて、このグループの一味である人々を悪魔のように見ないでいられるなら、あなたは、イエスや他の偉大な教師たちに従う勇敢な人である。

許すことと理解することは、これを通り抜ける道である——他者を人間以下の怪物として、死にしか値しないと決めつける、同じ昔のサイクルを再現させることではない。

ひとたび我々が、このグループが全く現実のものであり、その構成員のほとんどが罠にはまっていると感じ、命の危険を感じていることを理解したならば、物語は非常に変わってくる。

さまざまなインサイダーによると、何らかのやり方でこのグループに直接関わっている人々は 100 万以上になるらしい。

もし彼らの一部が、前面に現れて暴力をやめたいと言ったなら、彼らはチャンスを与えられねばならない。

ここにはより大きな宇宙的計画が働いている、と私は感ずる。もし我々が、彼らを一方的に人非人として扱うとしたら、そのときには我々がテストに落ちることになる。

このテストは、歴史そのものの潮の満ち干の中に埋め込まれている。ランダムなものは何もない。一つの**物語**が歴史の中に書き込まれている。

我々が経験するあらゆる大きな出来事は、我々自身の霊的進化のために、**知的に構造化されている**——そしてその**物語**の中に場所を占めている。

信ずるのは難しいように思える。これが非主流的考え方であるのは明らかだ——しかしその証拠は圧倒的で、あらゆる偉大な宗教の伝統によって支持されている。

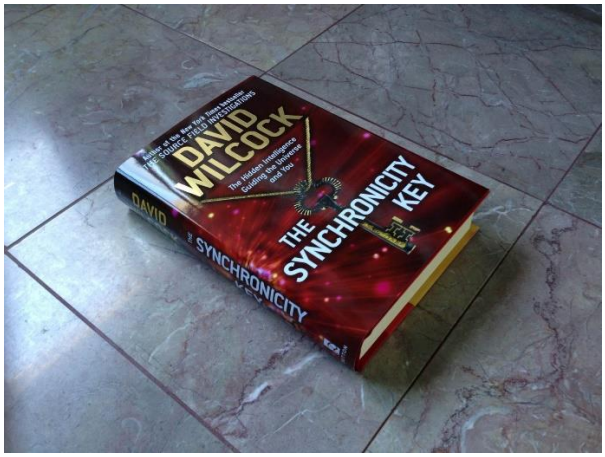
## 最後のどたん場

我々は現在、物語の最終決着の場面（どたん場）にいる——英雄が、勝利を得ようとする直前に、ネメシス（仇敵）と対決し最大の恐怖に直面する段階にいる。

我々の一人ひとりが個人的レベルで、直接これを体験しつつある。我々はもっと、これ以上にそれに直面しなければならなくなる——好むと好まざるにかかわらず。

ひとたび意を決して、真理に直面しようとしたとき、我々は「英雄の旅」に踏み込む——するとポジティブな世界への霊的な大革命の可能性が見えてくる。

私は最近著『ザ・シンクロニシティ・キー』でこれを主張するのに、歴史の繰り返すサイクルという現象を通じて、驚くべき科学的証拠を用いている。



## ナチ党は敗北しつつある――サイクルの上でそうなる

・・・この同じサイクル上のつながりが究極的に明らかにするのは、“プロジェクト・ペーパークリップ”作戦によって、第二次大戦後にアメリカへ持ち込まれた秘密のナチ党は、我々の時代のこの画期的戦いに敗れるということである。

1462 年の戦いに敗れた党派は、ほかならぬドイツの「ドイツ騎士団」――「陰謀団」のサイクル上の前身――であった。

注目すべき驚くべきことがある。それは今年の２番目に大きな映画 *Captain America: The Winter Soldier* で、ここに我々は――起こるであろう画期的な、高位者逮捕の強い暗示を含め――この巨大な出来事の正確な予兆を見ることができる。

私が *The Synchronicity Key* を書き、原稿に対する最後の重要な変更が 2013 年 4 月に加えられたとき、このデータは何ひとつ利用できなかった。

５月以降は、編集者の要求に従って、個々の単語だけを変更することができた。

## *Ironman 3* と *Captain America: TWS* の鍵となるシーンを読んでみよう

*Ironman 3* は、*The Hunger Games* に次いで、2013 年の 2 番目に大きな映画だった。

*Captain America: The Winter Soldier* は、*Guardians of the Galaxy* に次いで、いまだに 2014 年の 2 番目に大きな映画である。

併せて見ると、この２つの Marvel / Stan Lee の映画は、「陰謀団」を敗退させようと工作しているあの同盟を覗きみる、驚くべき、否定できない窓を提供している。

この同盟はまだ自らを公然と明らかにできないでいるが、この２本の映画はともに、彼らが何を狙っているかを非常に強力に暗示している。

どちらの場合とも、背後で何が行われているかを我々に教えるための、同盟からの豊かな資金による活動を見ているように私には感じられる――その一部は米軍内部からのものと思われる。

## 興味あるのは“The Mandarin”が ISIS に非常に近いこと

*Ironman 3*から始めよう。ここで主人公のトニー・スタークは、ベン・キングズリー演ずるオサマ・ビン・ラディンに似た悪漢“The Mandarin”に、その指令本部で出会う。

起っているのは、非常に驚くべきことである――“ザ・マンダリン”が、放映中のテレビをずっと妨害しており、我々の時代の究極のテロリストとして現れるのを考えれば。

> 統率の技術…は、人民の注意を単独の敵に向けて固定し、どんなことがあっても、その注意が揺らぐことのないように気を配ることにある――アドルフ・ヒトラー

驚くべきことは、ISIS というメディアのヒット・トピックが、*Ironman 3* の中の今から読者の読む対話で、**１年も前に**その全体計画がばらされてしまった後で、現在、派手に扱われていることである。

企業メディアの誰一人として、ISIS の筋書きと *Ironman 3*の“ザ・マンダリン”の、驚くべき類似性に言及した者はいない。

## トニー・スタークと“ザ・マンダリン”の対決

次に対話を引用する重要な場面は、1:14:26 から始まり、1:18:25 まで続く。

Robert Downey 役のトニー・スタークが、ザ・マンダリンの巣に闖入するが、彼はただビールを飲んで、豪華な女性を侍らせているだけである。

この対話は、トニー・スタークが、酔っぱらったマンダリンその人を急襲し、銃を彼の顔に突きつける瞬間から始まる。

トニー：おい！

マンダ：なんだ、この野郎！

トニー：動くな。

マンダ：何か欲しいのか、もっていけ。**もっとも武器はすべてニセモノだ、あの手こき屋どもがわしを信用して本物を持たせようとはしなかった**のでな。

トニー：何だと？

マンダ：おい、お前はあの小鳥ども（部屋にいる女性たち）が一羽ほしいのか？

トニー：つべこべ言うな、お前ではない。ザ・マンダリンだ、本物だ。どこだ？　マンダリンはどこにいる？　彼はどこだ？

マンダ：ワオ！　彼はここだ。彼はここにいる、しかし、ここにはいない。**彼はここにいるが、ここにはいないのだ**。

トニー：どういう意味だ？

マンダ：それはややこしい話だ、ややこしい話だ！

トニー：ややこしい？

マンダ：その通りだ。

トニー：ややこしい話か？　ご婦人方は出て行ってくれ。ベッドから出て浴室に入れ。［マンダリンに］坐れ。

［マンダリンは這って逃げようとする。トニーはその先を銃で撃つ。マンダリン正座する。］

マンダ：わしの名前はトレバーだ。トレバー・スラッタリーだ。

トニー：何者だ、お前は何者なんだ？　おとりか、それとも替え玉か、どうだ？

マンダ：わしは代役ではない。絶対にそうではない。［トニーは更に銃を近づける。］顔を傷つけないでくれ。**わしは俳優だ。**

トニー：お前はあと数分の命だ。しっかり話せ。

マンダ：**ただの役割だよ、ザ・マンダリンというのは。わかるか？　本物ではないのだ。**

トニー：じゃあ、どうしてお前はこんな所へきたのだ、トレバー？

マンダ：うーん、それはだな、ちょっとした問題があってな、まあブツだよ。まあ仕方なかったんだが、通りで、やっちゃいかん事をやってててな、捕まったのよ。

トニー：それから？

マンダ：それから、奴らがこの役割のことでわしに近づいてきたのだ。彼らはドラッグのことはよく知ってたよ。

トニー：彼らは、組織からお前を抜け出させてやると言ったのか？

マンダ：もっと儲けさせてやると言ったのだ！　いろいろ物をくれたよ。この御殿ももらったんだ。整形手術もしてくれた。いろいろくれたよ。［眠り始め、いびきをかく。］

トニー：今、居眠りしたのか？　おい。［彼を蹴る。］

マンダ：いいや、それにきれいな競争用ボートもくれたよ！　まあ要するに、**彼は誰かを必要としたのだ。ある爆発事件を起こした本人になってくれる者をな。**

トニー：彼？　キリアンのことか？

マンダ：キリアンだ。

トニー：お前を創造した奴だ。

マンダ：わしを創造した奴よ。

トニー：**オーダー・メードのテロ脅威だ。**

マンダ：そうだ！　まさにそれだ。**彼のシンクタンクが考え付いたものだ。**連続殺人鬼の病理だな。西洋の偶像崇拝の操作技術だ。［トニーにビールを渡す。彼は断る。］
わしの演技力のおかげで、ザ・マンダリンは命を得たのだ。

## ブッシュ政権との多くの類似点

映画がさらに進むと、「アイアンマン」のクローン・ロボットである「鉄の愛国者」が、大統領を殺すためのトロイの木馬として、用いられようとしていることが分かってくる。

これがまた、大きな不安の要因となって、自分たちの目標を達成するために“ザ・マンダリン”を用いている者たちの推進するテロ計画を、更に推進させることになる。

面白いことに、*Ironman 3* に出てくる大統領は、ジョージ・W・ブッシュに間違いなく似た

俳優によって演じられている。

## 副大統領はチェイニーそっくりで――逮捕され、ホワイトハウスから引きずり出される

最も驚くべきことは、米国副大統領が“ザ・マンダリン”の主たる雇用主だったことである。

映画の最後の場面で、**この副大統領は、後ろ手に縛られてホワイトハウスから出てくる。**

これが映画全体のクライマックスだった。

これは、様々なインサイダーたちが何年も前から我々に話していたこと――ペンタゴンのインサイダーたちは高位者の逮捕を計画しているということ――を明らかに確証するものである。

## ９・11 への洞察

これはまた、9・11 が自作自演であったこと、そしてビン・ラーディンがずっと密かにブッシュ政権のために働いていたことを、間接的に、しかし強力に示唆するものである。

真理ジャーナリズムの鍛えられたベテランであれば、“Tim Osman”（CIA によるビン・ラーディンの別名）などといったものについての何百という記事を読んでいることであろう。私に関する限りそうだ。

*Ironman 3* は、**あの同盟が何を準備しているのか、なぜそれが必要なのか**を、一般大衆に対

して、きわめて直接的に教えるものだった。

副大統領を演じている俳優は、外見と全体的な雰囲気において、ディック・チェイニーに並々ならず似ている。

## *Captain America: TWS* における「プロジェクト・ペーパークリップ」の暴露

本年（2014）の *Captain America: The Winter Soldier* においては、さらに多くの情報が、全世界の一般大衆に対して暴露されている。

この映画は、我々が 2011 年以来、情報をリークしてきたあの同盟が、現実に存在することの、最大の最も確かな証拠の一つになっていると思われる。

私は映画を推奨することはめったにないが、これは *Ironman 3* と同様、もしあなたがまだ見ていなければ、是非とも見ることをお勧めするもう一つの例である。

この映画全体が本質的に、アメリカの情報機関を乗っ取った秘密のナチ陰謀団を壊滅させようとする、インサイダー同盟の小さなグループの物語である。

一方の陰謀団グループは、自分のことを“ヒドラ”（９頭の大蛇）と呼んでおり、この“大きな暴露”は映画の 1:01:21 から 1:06:31 にかけてやってくる。

Hydra のロゴは、間違いなく「スカル・アンド・ボーンズ」秘密結社の印に似ており、それはまた「スカル・アンド・クロスボーンズ」の印からきている。

「スカル・アンド・クロスボーンズ」の黒旗は、テンプル騎士団が実際に所有し経営していた海賊船上に、はためいていたものだ。

メソアメリカから来る黄金の禁令と窃盗は、「陰謀団」の初期の形であったテンプル騎士団に、莫大な資本を供給した。

## *Captain America* の驚愕すべき対話を読んでみよう

ここで、SJ は Scarlett Johansson、CA は Captain America、C はコンピューターを表す。SHIELD とは、アメリカ軍産複合体とその情報機関のことである。

できる限り少ない言葉で、できる限り多くのことを言うために、映画の対話を微調整するのにどれだけ時間がかかるかを考えれば、ここは実によく考え抜かれていると私は自信をもって言える。

このコンピューターもまた、対話を補助するための、たくさんの動く映像を見せる。だから完全な効果を得るには、どうしても映画を見なければならない。

SJ: これがデータポイントではないでしょう。この技術は古いものよ。

［彼女は USB ポートを見て、USB スティックを挿入する。コンピューターが生き物のように動き出す。スクリーンに「システムを導入しますか？」と出ている。彼女は「イエス」と書き込む。］

SJ: ゲームをしましょうか？　これは私のおじいちゃんの頃の映画・・・

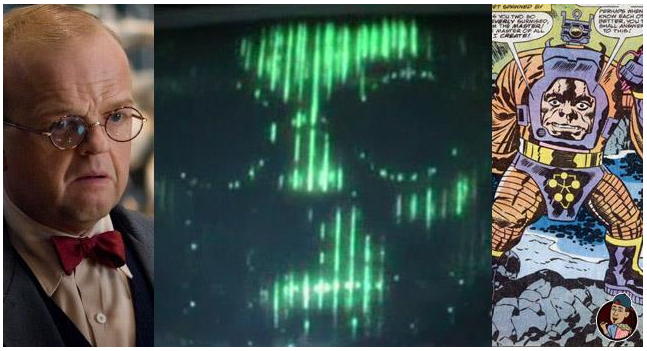
CA: そうだ、見たことがある。

［コンピューターが唸って生き返る。］

C: ロジャーソン、スティーヴン、1918 年生まれ。［カメラが SJ に向く。］ロマノフ、ナタリア・アリアノヴナ、1984 年生まれ。

SJ:　何かの記録のようね。

C:　私は記録ではありません、お嬢さん。私は、キャプテンが 1945 年に私を捕虜にしたときの私ではないかもしれませんが、存在します。［最初の人物の絵に変わる。］



SJ:　［CA に］あなたはこれを知っているの？

CA:　アーニム・ゾラは**ドイツの科学者**で、レッド・スカルで働いていた。もうとっくに死んでいるよ。

C:　最初の修正。私はスイス人です。2 つ目。しっかり見なさい。私はこれまでになかったほど生きている。

1972 年に私は末期の診断を受けた。科学は私の体を救えなかった。しかし救う価値のあった私の心は――20 万フィートのデータバンクに。あなたは私の脳の中にいる。

CA:　あなたはどうしてここに来たのか？

C:　招待されたのです！

SJ:　**ペーパークリップ作戦でした。第二次大戦後、SHIELD は、戦略的価値をもったドイツの科学者たちをリクルートしました。**

C:　それで**私は彼らの目的に応えようとした。それは私自身の目的でもあった。**

CA:　ヒドラはレッド・スカルと共に死んだ。

C:　1つの頭が切り落とされると、新しく2つ現れた。

CA:　証明せよ。

C:　アクセス用アーカイブ。［イメージ現れる。］

C:　ヒドラは、**人間にそれ自身の自由を任せてはおけない**、という信念の上に結成された。我々が理解できなかったことは、彼らから自由を奪おうとすると、彼らは抵抗するということだった。

戦争が我々に多くを教えた。**人類はその自由を喜んで返上する必要がある。**

**戦争後、SHIELDが創設されて、私は徴用された。**

新しいヒドラが生じてきた――ある美しい寄生物がSHIELDの内部に。

**70年間、ヒドラはひそかに危機を食って生きてきた――戦争を生みながら。**

**そして歴史が協力しないときには、歴史は変えられた。**

SJ:　それは不可能よ。SHIELDがあなたを止めたでしょう。

C:　事故は起こるものだよ。［抵抗して死んだ人たちの映像。その一つはケネディの暗殺に非常に似ている。］

**ヒドラは世界をとても無秩序なものに創り上げたから、人類はついに安全保障を得るために、自由を犠牲にしようとしている。**

**ひとたび浄化の過程が完成したら、ヒドラの新世界秩序が現れるだろう。**

我々は勝ったのだ、キャプテン。あなたの死は、あなたの生命くらいの価値がある。ゼロサム・ゲームだ。

［キャプテン・アメリカは、このスクリーンをぱちりと消す。別のスクリーンが現れる。］

C: 言おうと思っていたのだがね・・・

CA: このドライブには何が入っているのだ？

C: 「プロジェクト・インサイト」はインサイト（洞察力）を要する。それで私はアルゴリズムを書いた。

SJ: どんなアルゴリズムなの？　何をするの？

C: あなたの質問に対する答えはわくわくするものだ。不幸なことに、あなたはそれを聞くには死に過ぎているだろう。［彼らの背後で、ドアが激しく煽られ閉ざされる。］

SJ: ［スマートフォンを見ながら］スティーブ、嫌なものが飛んで来たわ。短距離弾道ミサイル、30 秒しかない。

CA: 誰が発射した？

SJ: SHIELD よ。

C: どうやら引き止めたようだな、キャプテン。すまない。こっちへ来た方がいい。

［CA が床の格子蓋を引き上げ、飛び込める穴を見つける。］我々は二人とも時間がない。［ミサイルが命中！　CA と SJ は飛び込み、かろうじて間に合う。］

## 「プロジェクト・インサイト」とは何か？

「プロジェクト・インサイト」とは、大気圏へと上昇する 3 機のホヴァリング・クラフト母船を擁し、ヒドラにとって脅威となるすべての人間を標的にする計画である。

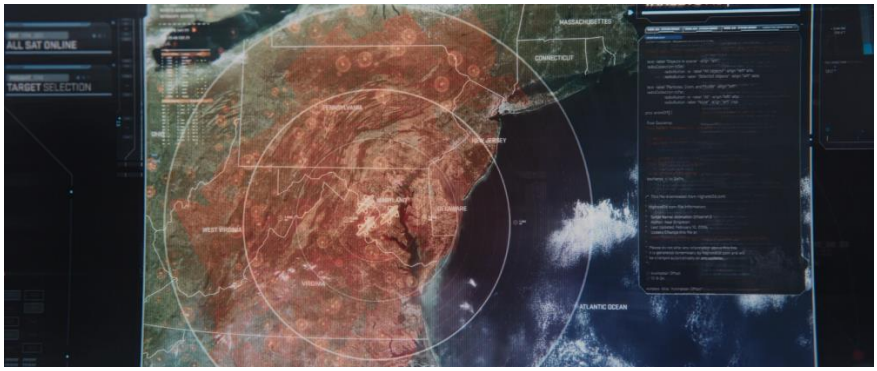
この写真は、彼らが海岸の秘密の地下基地から飛び立ったところである。

コンピューター制御による装置が、１秒に何千人という人々を、粒子ビームの兵器によって即死させる。

ヒドラは、これによって彼らに抵抗する者を、たった一度の強力な打撃で殺すことによって、彼らの目標を達成できるものと信じている。

「プロジェクト・インサイト」の標的のモンタージュ写真には、米大統領をはじめ、ホワイトハウスのみならずペンタゴンの多数のスタッフが含まれている。

３機の母船が“掃討”を始めようとしている最初の地域は、アメリカ北東部であることがすぐわかる。



## コレラの映画には、ほとんどの人々が理解できないほど多くのインサイダー情報が含まれている

我々の知る最も高位のインサイダーの一人は、この映画を見たとき、完全に打ちのめされたと言っている。

彼は、この映画の航空母船は、米軍が現実に秘密に所有しているものと**完全に同じだ**と言った。

私が聞いた話では、これらの母船は“masking”と呼ばれる、光を曲げる技術をもっているが、軍は時折その姿を見せるということだった。

地上からは、それらは通常、夜空の光のグループとして見えるだけで、“もう一つの UFO 目撃例”として片づけられる。

この映画のジェット機のすべては、本物の、極秘の航空機でもあり、少なくとも 1980 年代に遡る。

更には、これらの航空母船の特徴は、映画で見るのと同じように、3 機のグループで行動することである。

現実世界では、この 3 つの母船の一つが、空飛ぶ黒い三角形――TR-3B――となり、他の 2 つが搭載できないより大きな航空機を運んでいる。

パリ上空に現れた黒い三角形と言われる次の写真は、おそらく偽物だが、TR-3B の本当の姿に非常に近いものである。

2 機のわずかにより小さい航空母船は、*Captain America* や *The Avengers* で我々が見るように、より大きな三角母船の防衛役を果たしている。

また我々のインサイダーの言によると、母船の基地での「プロジェクト・インサイト」の砲台突出部は heads と呼ばれ、これらの兵器と形が全く同じだという。

要するに、この映画で「プロジェクト・インサイト」として説明されている技術は、絶対的に現実であり高度に極秘のものである。

私はこの技術について、今から少なくとも 3 年前に聞いていたが――それを主流映画で見ようとは、全く夢にも予想していなかった。とても超現実的な感じだった。

私は決して一言もそれについて言わなかったが、それは脅迫とその秘密のレベルと、決して利用されることはないだろうという固い信念からであった。それが今、きわめて人気ある映画になって表れている。この装置は、ニセのエイリアン侵略で、すでに使われたかもしれない――高レベルのポジティブな ET による“神の介入”と、同盟による勤勉な警察行動がなかったとすれば。

## *Captain America* における他の重要な場面

この映画の終局の、スカーレット・ヨハンソンの裁判に行く前に、別の 2 つの場面に言及しなければならない。

1:12:44 の時点で、米上院議員を演ずる Garry Shandling が、あるトップの SHIELD 工作員と出会うシーンが始まる。

ショッキングなこの瞬間に、シャンドリングは工作員の手を握り、“Heil Hydra”と彼の耳元にささやく――これが 1:13:16。

この嘔吐を催しそうな場面は、この陰謀団の浸透力が、選挙による政府と情報機関を通じて、どこまで及んでいるかを明らかにしている。

もう一つの重要な場面は、キャプテン・アメリカと彼の同盟軍が、最後のひと時に、3機の航空母船をすべて破壊するのに成功した後である。

1:55:04に、ロバート・レッドフォードの演じる、ピアスというヒドラの統領らしい人物が、彼の偽装が暴かれてのち、銃の傷で血だらけになって死ぬ。

私は暴力を決して弁護する者ではないが、これは、「陰謀団」内部のある高位の工作者たちが、公開の裁判にかけられるよりも、むしろ暗殺されるかもしれないことを暗示する。

私の推測では、もしそれが起こるとすれば、それは最も極端な脅威があった場合に限られるように思える。

## 公開裁判の予兆

もし「陰謀団」の検挙が、さまざまなインサイダーと、今これらの映画がリークしている通りに進行するとすれば、それは民衆の公開裁判になる可能性が極めて高い。

非常に高位の、殺されも自殺もしなかった「陰謀団」のメンバーが、国営テレビジョンに姿を現し、彼らの知っているすべてを裁判の席で明らかにすることだろう。

有名なポップ・スターや映画俳優が、これらの裁判に現れるであろう――そして彼らの口から聞くとは思いもかけなかったようなことを、我々は聞くだろう。

**これは、選挙された役人や国家の指導部にまでずっと階層を遡ると考えられる**。もしこういうことが起こるとすれば、それは現代史で最も目を開かれる瞬間になるだろう。

大統領などが国営テレビで泣き崩れ、自分たちがある隠れたグループによって、どんなに脅され、脅迫され、拷問にかけられていたかを話す光景がどんなものか、想像してみるとよい。

この陰謀団は非常に秘密主義だから、トップレベルの人々でさえ、我々が予想するほど多くのことは知らないかもしれない。しかし彼らの物語は、きわめて的を突いたものになるだろう。

否定の集団的壁は崩れ落ちるだろう。我々すべては“快適ゾーン”から移動させられ、新しい真実を自明の事実として受け入れるように強いられるだろう。

多くの人々がこれによって心身動転することであろう。それはちょうど、あなたが部屋に入っていき、あなたの愛する人が別の人物とベッドにいるのを発見するのに近いであろう。

［訳者注］そのときの衝撃のために頭を柔らかくしておくことが、もう一つの目覚め、4次濃度世界に対する適応力を強めることにつながるかもしれない。

我々の神、宇宙の善、またこの人生の感覚全体が、根本から揺らぐだろう――そして新しい洞察が要求されるだろう。

すべての人々が、我々は平等に創られていると信じているわけではない。ある小さなグループのリーダーたちは、人類を、根絶すべき地上の癌と考えてきた。

## あり得ないと思えるかもしれない、しかしそれは過去にも起こった

そんなことはあり得ないと思えるかもしれない。しかしそのような出来事はこれまでにも起っている。それは何千年という年月を通じて、この地上で繰り返し聞かされてきた古典的な物語の筋書きの一部である。

『ザ・シンクロニシティ・キー』で私は、フランス革命時の恐怖政治とロベスピエールの暗

殺、それにソビエトの独裁者ヨシフ・スターリンとの間の、顕著なサイクル的つながりを明らかにした。

ナチスの敗北とそれに続くニュルンベルグ裁判は、その当時としては想像できなかったと思われるが、現実に起こった事件の一つである。

文明全体が、これまでに何度もストーリーのこの部分を通り抜けてきた。ほとんどの人が理解していないのは、そのすべてがいかに正確にサイクルをなしているかである。

我々の裁判も、*Captain America* に全く驚くばかりに予言されている。それは映画の終わりで、ほとんど後からの思い付きのように起こる。

## スカーレット・ヨハンソンの演ずる人物が、極秘文書をリークし裁判を受ける

スカーレット・ヨハンソンの演ずる Black Widow/ Natalia が最後に、膨大な量の極秘の SHIELD 文書を USB 端末からインターネットへリークする。

その過程で彼女は、深刻なダメージと思われるものを情報機関に与える。こういうことが起こってしまった今、どうしてアメリカは敵に対して防衛することができるだろう。

この最終場面で、彼女は自分のやったことに対して、公開裁判で政府官憲に絞られる。2:02:43 にそれが始まる。

## 対話を読んでみよう

ここに、裁判中に行われた登場人物間の決定的な対話を示す。名前がわからないので、私は最初の人物を G、二人目を G2 とした。

G:　なぜキャプテン・ロジャーソンから、いまだに何も言ってこがたないのだろう？

SJ.　もうこれ以上言うことが彼にあるとは思えないわ。私は、ポトマック川の真ん中で起こったあの難破が、彼の言いたいことをかなり雄弁に語っていたと思う。

G:　まあ、**彼と君が我々の情報機関をめちゃくちゃにした今となっては、この国がどうやって国家安全を維持できるのか**、彼は説明できるのではないか？

SJ:　ヒドラはウソを売りつけていたので、情報じゃないのよ。

G:　そのうちの多くは、あなた（G2）が直接かかわってばら撒いていたようだ。

G2:　職員さん、この委員会にはね、あなたの勤務記録を見せたら、この国の為の発表も、為でない発表も含めて、あなたは刑務所に入っているのだと思う人たちがいることを、知っておくべきだ――キャピトル・ヒルの代弁とは思っていない。

SJ:　あなた方は私を牢屋へ入れるわけにおきませんよ。我々の誰をもね。なぜかわかりますか？

G2:　どうか教えてもらいたい。

SJ:　あなた方は我々が必要だからです。そう、この世界は傷つきやすい場所です。そして確かに、そうするのに我々も手を貸したのです。

**しかし我々はまた、それを防衛するのに最も適した者たちです。**

だからもし私を逮捕したければ、逮捕しなさい。私の居場所は教えてあげます。［彼女

去る。]

## 最初のラウンド終了後に見える更なる困難の予言

次に引用する対話では、サミュエル・ジャクソンの演ずる元 SHIELD 統領 Nick Fury が、陰謀団（ヒドラ）のすべての者が、第一波で正体を明かされたわけではないと説明する。

この対話は 2:04:35 に始まる。

NF:　我々はヒドラのファイルのデータ調査をやっている。**船と一緒に沈まなかったネズミどもがたくさんいるようだ。**

**私は今夜ヨーロッパへ立つ。**あなた方も一緒に来るか聞きたかったのだ。

CA:　私は先にやっておくべき用がある。

## 更に３つの、名をあげておくべき驚くべきディスクロージャー映画

インデペンデント・フィルム *Snowpiercer* もまた、*Captain America* におけるようにクリス・エヴァンズを主役に用いていて、非常に面白い、「陰謀団」についての暴露映画である。

ここでは人類の残った最後の者たちが、ともに列車上にとらえられ、これが「陰謀団」が現在人、人間をどう扱っているかの比喩になっている。

人口を減らして維持するために意図的に戦争がつくり出され、最後には、エヴァンズの人物が中心になって起こした暴力革命のゆえに感謝される。

## *Oblivion* および *Edge of Tomorrow*

さらに、最も新しいトム・クルーズ映画 *Oblivion* と *Edge of Tomorrow* もまた、価値の高い、驚くべきデータを提供している。

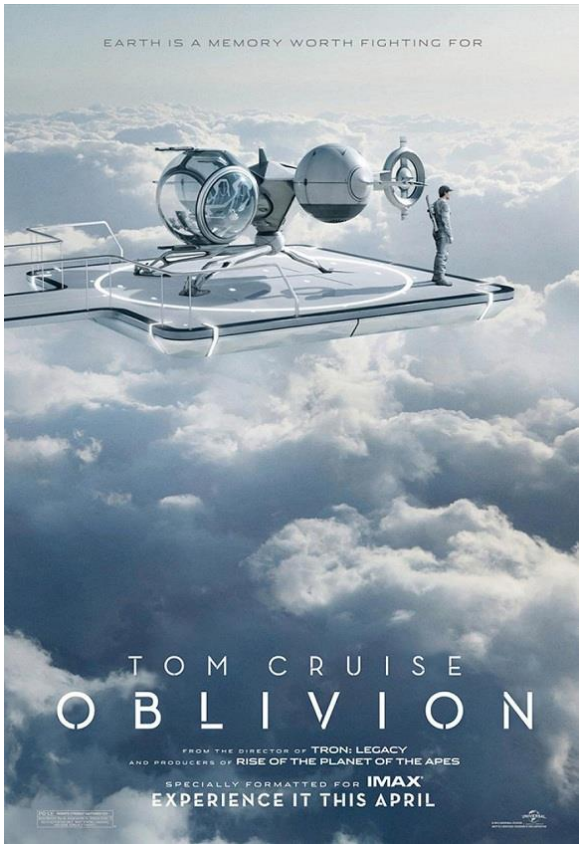
*Oblivion*（忘却）をまず論ずるとしよう。これは興行的には *Ironman* 3 ほどには成功しなかったが、それ自体やり方で眼を開かせてくれる。

## Oblivion はフィクションと見せかけたドキュメンタリー

映画 Oblivion は、人類のほとんどが、明らかに地球から宇宙の植民地へ移住させられたところから始まる。

巨大な船が、海からすべての水を抜いている――名目上は、地球が“死に”、水が植民地に必要だからである。

生き残った少数の者たちは悪漢、またはエイリアンとしてさえ扱われている――そして無人機が彼らを連れ出すのに使われている。




トム・クルーズの人物は、未来風の、浮遊する楽園に妻と一緒に住んでいて、宇宙にいる人間の生き残りのために兵士として働いている。

彼はいま、いくつかの無人機を修理しようとしているが、それらは彼以外の残された者を、誰彼なく殺そうとして飛び回っている。彼の仕事は、それらが機能するようにすることだ。

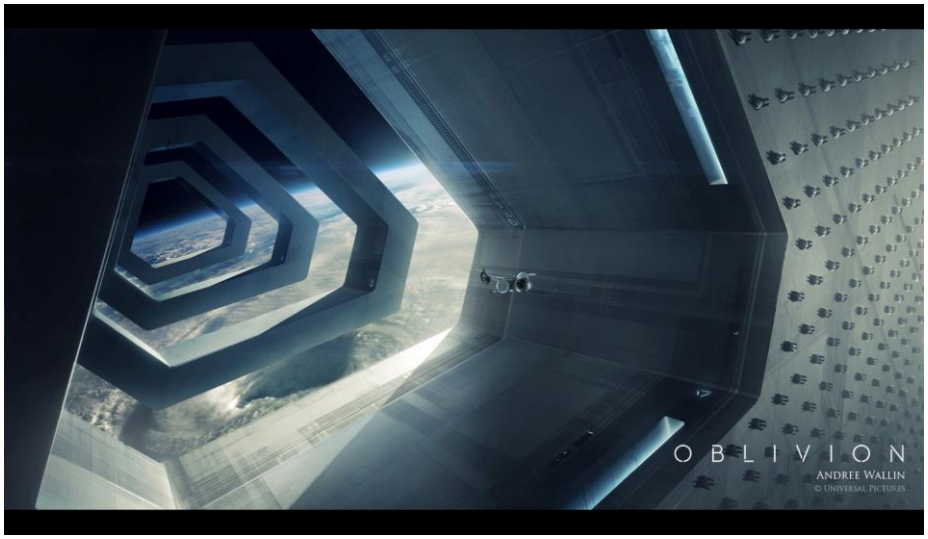
彼はある決められた範囲内だけで活動するよう教えられている――その範囲外のすべては放射能が高いからだ。

## “TET" が問題の中心である

究極的に、クルーズの人物は、無人機が殺している人々は怪物でもエイリアンでもないことを知る。彼らは人間の生き残った者たちにすぎない。

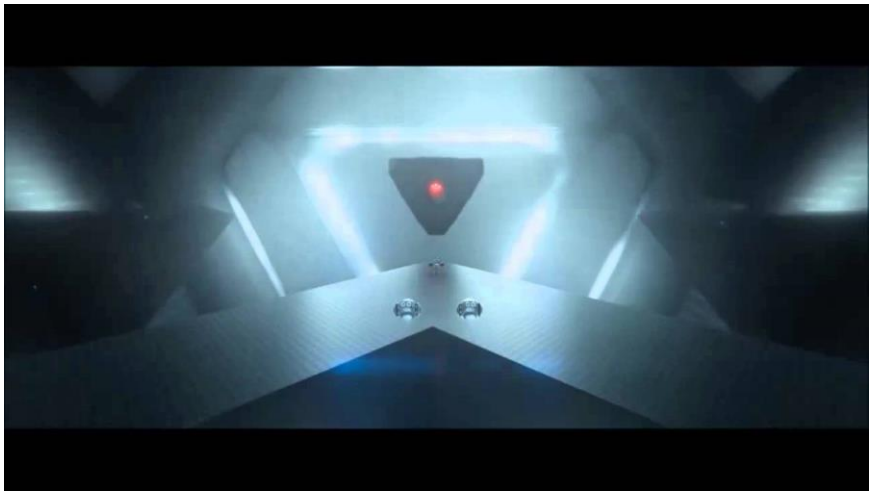
この“TET" と呼ばれる、宇宙の巨大な人間植民地とされているものは、実際は、地球を侵略しこれを破壊している、地球外の AI（人工知能）システムである。

“TET" とは明らかに Tetrahedron を略したもので、三角形ピラミッド（正 4 面体）である。フーム。



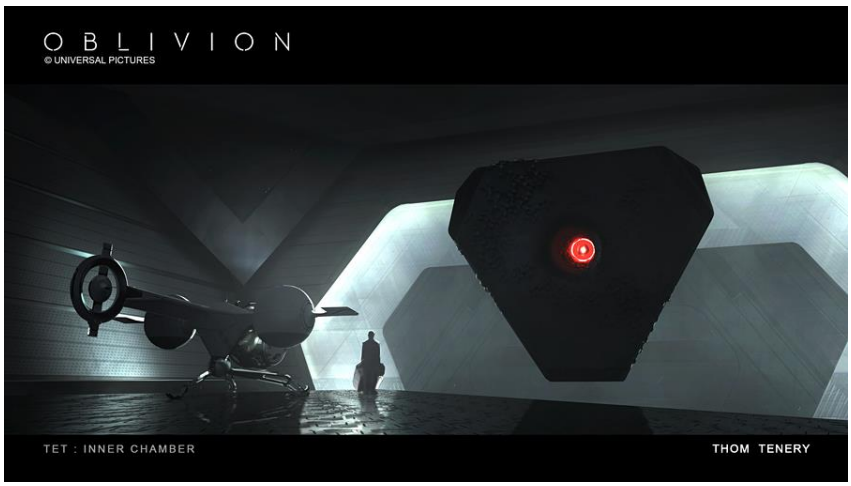
さまざまのプロットの捻じれはここで明かさないことにして、クルーズの人物は結局、最後には、この人工知能の脅威と直接、対決することになる。

彼が目にするのは、巨大な、真ん中に赤い点――眼――をもった、上下逆さの三角形である。



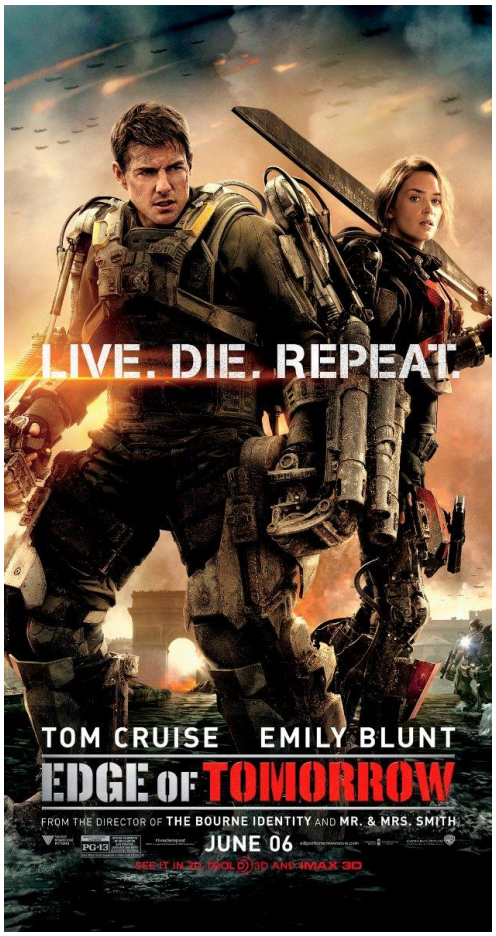
これは間違いなく、米合衆国の国璽のピラミッド上部にある、三角形の中の、イルミナティの“すべてを見る眼”である。

メッセージは、三角形を逆さまにし、コーナーを切り取ることによって、わずかに隠されている。




*Edge of Tomorrow* も、同じくらい強いメッセージを発している

*Edge of Tomorrow* では、メッセージはある意味でもっと明らかである。




クルーズの人物は、高位の将校だが、歩兵として活動的な任務に組み込まれ、投げ込まれている。

彼は、彼自身の体の動きを容易くする、高度に進んだ戦闘ロボット・システムを身に着けていて、恐ろしいエイリアンとの戦闘に突撃する。

エイリアンたちはほとんど時をおかず、軍隊の位置を待ち伏せする。彼はかろうじてパラシュートで地上に降り、敵の一人を殺し、すぐ後で死ぬ。

彼はそれから生き返る——何度も何度も。彼は死ぬたびに、Groundhog Day のように、再び同じ日からやり始める。

## 侵略する ET の最後の司令部は大いに目を開かせる

時がたって、クルーズとエミリー・ブラントの人物は、侵略をやめさせる唯一の方法は、すべてを動かしている中心的脳を取り出すことだと理解する。

私の興味と魅惑が絶頂に達したのは、この“脳”が、明らかなピラミッド形のものの内部に閉じ込められた、球塊をなす触手であることを発見したときだった。

これはどんなスチル写真によるよりも、映画において最もはっきりわかる。

この脳がどこにあるかを我々が知ったとき、興味はますます大きなものとなる。

最初、それはドイツにあって、ナチスの残った軍施設に隠されていたかと思える。

我々はすでに、*Captain America : TWS* の“ヒドラ”がナチ・グループであることを知っている。今、*Edge of Tomorrow* は正確に同じメッセージを伝えようとしているようだ。

## “脳”の現実の所在場所は、ルーブルのピラミッドの下だ

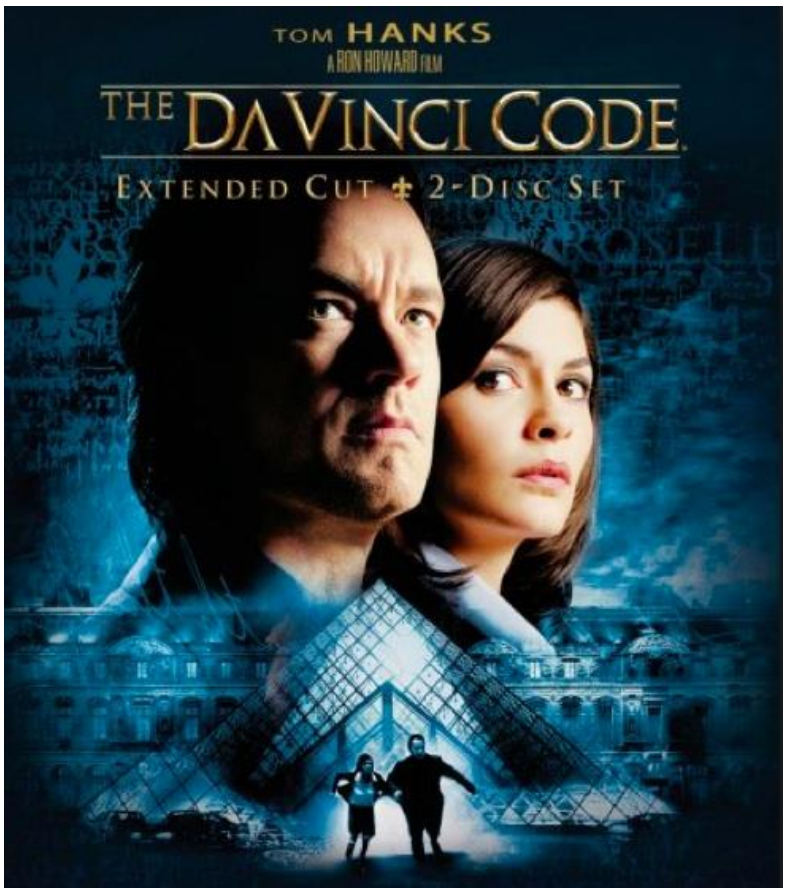
しかし、彼らが戦いながらついにそこに達したとき、そこは行き止まりだった。

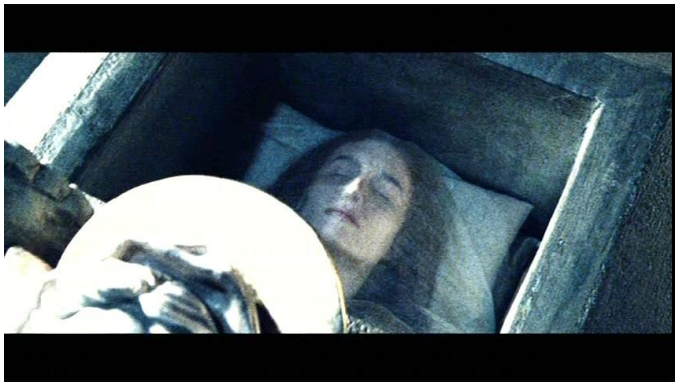
脳はずっと自分の本当の正体を隠していた――その真の正体と在り場所について、ニセの信号を送っていたのだった。

そのときにやっと同盟は戦局を進めて――脳の現実の在り場所を突き止める。

私にショックだったのは、この映画が、脳の最終的場所を、ルーブルのガラスのピラミッドの真下だとした時だった。

なぜこれが問題なのか？　これは『ダ・ヴィンチ・コード』の最終場面で、マグダラのマリアの遺体が埋葬されているのと全く同じ場所である。





## そもそもこうしたことがなぜ問題か？

“聖杯”は杯ではなくて、実は、神聖な秘密の王家の血統であるというのが、『ダ・ヴィンチ・コード』の究極のポイントである。

この“聖杯探し”は、イエスが十字架を生き延びて、マグダラのマリアとの間に子をもうけたという秘密を探すものとなる。

映画の終わりの場面で我々は、**これらの人々の多くがいまだに生きていて**、彼らは細心の注意を払って彼らの系譜を護ってきた、という発見をする。

インサイダーたちは、この映画は、人類へ向けた「陰謀団」による彼らの存在の公式のディスクロージャー、つまり彼らが“The Revealing”（公開）と呼ぶ出来事を予言するものして意図されたものと確認している。

自分たち自身を、キリストの生ける子孫として描いてみせることによって、彼らは我々の間

に、神々として公的に受け入れられることを望んだ。

私はこの物語について多くの魅惑的な詳細を、警告者証言を含めて、画期的な 2007 年の *The Revealing* という論文で扱った。（リンク）

James Cameron は、イエスの亡骸を納めたといわれる――DNA テスト可能な遺灰を完備した――棺を公開しようと準備している。（リンク）

## イルミナティの各種シンボルが『ダ・ヴィンチ・コード』にあふれている

イルミナティのシンボルが、この映画の宣伝に広く用いられた――次のポスターのような、オードリーの眼の上の、それとわかる三角形を含めて。

*Edge of Tomorrow* における侵略するエイリアンの集合心理（hive-mind）が、『ダ・ヴィンチ・コード』のマグダラのマリアの遺骸の埋められた、全く同じ場所にあったということは、偶然ではありえない。

私は、トム・クルーズのように、サイエントロジストである歯医者にかかっていた。

私はよく、こうした事柄について人々に話し、彼らがどのていど対処できるかを静かに見る。

私には、サイエントロジストたちが、「陰謀団」について非常によく――ほとんどの人々よりよく――理解していることがすぐに分かった。

血統の問題は非常に興味のある話題で、第 2 部でそこへ戻ることにする。

多くの点で言えることだが、「陰謀団」が最も高いレベルで信じているのは、彼らが『ダ・ヴィンチ・コード』のような映画で見せているものの、合わせ鏡的対立物（mirror-opposite）である。

## 歴史のサイクルへ話をもどそう

私は読者の方々が、今までこんな私がこんな風に要約したことのなかった、この新しいデータによって、自分が一人ではないということを理解されたと思う。

地球的エリートの陰謀団が存在するという考えは“陰謀論”として、インターネットの疑わしいサイトに追いやられ、千年期偏執病として片づけられるようなものではない。

十分に多くの有力な人々が今これを知っていて、「陰謀団」を暴き逮捕するというテーマが、大型予算のハリウッド映画に入り込みつつある。

すべてのハリウッド映画が「陰謀団」の影響されているわけではない――確かにその多くがそうだが。

スタン・リーもトム・クルーズも、他の成功した映画から稼いだお金を、ポジティブなメッセージを伝えるために使っているように見える。

最も面白いことは、これらの映画は、インサイダーたちが我々にずっと漏らしていたこと、すなわち、ある国際的な同盟が問題を解決しようと働いているということを、確認させてくれることである。

今我々が起こっているのを見ている出来事の何一つとして、そのタイミングや内容においてランダムなものはない。また、このハイレベルな逮捕も、予期できなかった、今までに見られなかった光景ではないはずだ。

これは、ある知的な存在による、地球物語の筋書きとして、地球上のすべての生命よりはるかに古い、宇宙サイクルに書き込まれた出来事なのである。